



詩人のマーサ・ナカムラさんとゲストとの歓談を通して、詩の味わいや、味わい方の多様さを探る連載「詩味礼讃 好詩家たちの対話」。第九回はマンガ『月に吠えらんねえ』（65ページ参照）の作者・清家雪子さんをお迎えしました。

詩とマンガ、詩と小説

マーサ 私はことあるごとに好きだと公言するほど『月に吠えらんねえ』（以下、『月吠』）のファンで、今日も対談の前に読み返してきたんですが、読むたびに涙が出たり、励まされたりしています。

清家 ありがとうございます。私もマーサさんの詩が好きなんですが、近代の詩人だと、どなたがお好きですか？

マーサ 『月吠』の登場人物ではなく、実在した詩人で誰が好きかという話だと、尾形亀之助が大好きです。清家 尾形亀之助は、キャラクター設定はありつつも、なかなか話がまつまらなくてまだ登場していない人物

の一人で、主人公である朔くんどう絡めようかと考えあぐねているところです。

マーサ 学生時代は文化構想学部という、ほぼ文学部のような学部にながら、詩はほとんど読んだことがなくて、読んでも絶対に面白くないという思い込みさえあったんですが、単位を取るために詩を書かなければならなくなりました。でも、いざ書くとなっても書き方がわからず、大学の図書館にあった現代詩文庫を片っ端から読んでいたときに尾形亀之助に出会って、「この人、めっちゃ面白い！」となって。

図書館といえば、個人的に、図書館の本を全部読もうキャンペーンを開いたことが、『月吠』を描きかけになったという話を『現代詩手帖』の『月吠』特集（二〇一八年六月号）で読んだんですが、キャンペーン中に読んだ本では「近代詩が一番好き」だったと語っておられたのが印象的でした。

清家 私も詩はあまり読んでこなかったんですが、そのわりに、子どもの頃になりたかったのは吟遊詩人で、詩人への憧れはずっとあったんです。言葉ひとつを武器にする生き方って、やっぱりカッコいい。でも、自分ではまったく書けません。

マーサ 『月吠』では、視点は朔くんだけだけど、朔くん自身が自分がどこにいるのかわからなくなる、みたいな場面展開をすることがありますよね。あの感じを讀むと、「これは詩だ」と私は思ってしまうんです。

清家 マンガで詩をやっているところはあると思いますが、それを言葉ではできないから、「詩人かっこいい！」となっちゃう。

マーサ 『月吠』のことを初めて知ったとき、タイトルからして萩原朔太郎が出てくるのは間違いないだろうから、これは詩人として読んでおかないとダメだろうと思いつつ、一時は距離を置いていました。私にとって萩原朔太郎は、詩とは何かがよくわからなくなっていく詰ったときに手を当てると「そうだ、私はこういう純粹芸術を目指していたんだ」と思うことができる水晶玉みたいなもので、『月吠』を読むことで、そんな朔太郎像が崩れてしまう気がしたんです。

でも、すごく落ち込んでいた時期になんとなく読んでみる気になって手にしたら、一気にはまりました。朔くんが、白さんを心の中で追い求めながら「二線を越えてしまったらどうしよう」と思うところに、すごく共感してしまっただけです。あそこまで共感でき